
怪盗ジャヌヴィア

酔仙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗ジャヌヴィア

【Nコード】

N7035W

【作者名】

酔仙

【あらすじ】

怪盗ジャヌヴィア、それは今の所誰にも素顔を見られた事のない泥棒、盗みの腕は超一流、誰にでもどんな物にでも化けられる変身制御の使い手
どんな相手をも欺く頭脳と幻術の使い手、そして盗んだ物を闇に売り捌き、
今日一日を面白可笑しく生き抜いている。

ジャヌヴィアのモットーは誰も傷付けない事、自らは絶対に人を傷付けたりはしない。

そして誰にも素顔を見せたりはしない、謎めいた怪盗、管理局を手玉に取り、

悪徳商人からは財産を取り上げ、不正を働く者は容赦なく晒し者にする。

そして誰よりもストイックに生きている。

そんなジャヌヴィアを追いかけるのは時空管理局刑事課捜査4課の捜査官

グレイス・甲州、彼女はジャヌヴィアを捕まえる為、その一生を捧げる覚悟をして追いかける。

時々スクールの生徒を巻き込んだり、次元航行隊やスクール卒業生を向こうに回しての大立ち回り、

一体ジャヌヴィアの正体は？そしてジャヌヴィアを捕まえられる日は来るのか？

リリカルなのは外伝、リリカルなのはSchool？異聞、怪盗ジャヌヴィア始まります。

このお話は、本編のスクール？と同じ時間軸で話が進みますが、基本的に余り本編には絡んできません。

ジャヌヴィアをルパンに例えるなら、グレイスは銭形です。

広い次元世界を股に掛け、時々管理局を巻き込んでとんでも無い事件を起こしたりします。

でもその犯罪の陰には更なる巨悪が隠れていたり、とんでも無い秘密が暴露されたり、

いろんな騒動が起きたりします。

果たしてジャヌヴィアは何者なのか？

このお話は本編の片手間に書いているので、更新が遅くなる事があります。

基本的に思い付いた時だけしか書きません、それでも付き合ってやろうという奇特な方だけ読んで頂ければそれで良いです。

登場人物紹介

怪盗ジャヌヴィア

誰も素顔を見た事のない泥棒、盗みの腕は超一流。

変身制御、幻術の使い手で誰にでも何にでも化けられる。

他にも転移・転送魔法も使いこなす。

今の所直接人を傷付けたという報告はない。

依頼を受けて盗みを働いたり、盗んだ物を売り捌いたりしている。

宇宙人ジョーンズ

何故かミッドチルダ調査中

マス・ラヴァル49才 男

473部隊長、かなりのんびりしている。

ヴィラ・エミール・27才 女

ツインテールのめがねっ子、（美由希さんが、かぶっている、なのは談）

剣型アームドデバイス所有、

バローロに惚れている。

473部隊の執務官、犯罪捜査のプロ、かなりの強さを誇る。

レヴ・ゴールダート（レヴ・ドトース）執務官27才

本局警防部刑事課捜査一課所属、

捜査一課は広域凶行犯が専門の部署

ティアナがスクールの教師になる前にいた部署

ミユスカと結婚した。子供4才が居る。

最近現場復帰したばかり。

山田・錦 捜査官27才

本局警防部刑事課捜査二課所属

捜査二課は単一世界の凶行犯が専門の部署

グレイス・甲州27才

本局警防部刑事課捜査四課所属

捜査四課は窃盗犯・侵入犯が専門の部署

最近ジャヌヴィア専属で捜査に当たっている。

ミユスカ・ゴルダート26才

本局警防部警備課スワット隊3番隊隊長

レヴの旦那、鬼の警備隊長として鳴らしている。

スペシャルフォース

スペシャルフォースは現在5つの小隊と5名のロングアーチ、

副部隊長と部隊長、融合騎1名？戦艦の整備員15名の合計43名からなる。

ヴァンサン・ロシェット1佐27才

部隊長、次元世界最強の男

現在武装隊20名を抱える。

スクールの指揮官研修を一手に引き受けている。

ミッドチルダーの子作り名人と言われる。

エマルジョンコレクトの開祖であり、

4組の生徒にエマルジョンコレクトを教える事もある。

アマローネ・D・ヴァルポリーチェ27才

3佐、執務官にして副部隊長

ヴァロット不在時には指揮を任せられている。

「誰か嫁にもろて」

アプリリア???才、身長27センチ

ヴァロットが道ばたで拾った融合騎、

自分の名前以外何も覚えていなかった。

その後転送魔法を中心に各種の魔法を覚える。

現在はロシェット家のマスコットおよび、ブラシカのパイロットを務める。

背中にトンボの様な4枚の羽がある。

融合する事で、ロードに風系、水系の攻撃魔法を与える能力を持つ

チームウィンド…全員が神速か飛毛脚を使いこなす。速い動きからの奇襲戦を得意とする。

アンナ・ベルク1尉27才

チームウィンド小隊長、FA

御神の剣、御式内を使いこなす。

未だにバローロに振られた事を引きずっている。

チームフォレスト…全員が霞み技を使う、攻撃力は高くないが、諜報戦を得意とする。

キュベ・ユウコ（不破祐子）2尉22才、通称ユウコ

チームフォレスト小隊長、GW

不破一族の出身、魔力はない

セルジュと結婚している。

御神の剣を使いこなす。アステイ以上の霞技の使い手
まだ子供は居ない。士郎の姪に当たる。

チームファイヤ…全員高い魔力と大火力砲撃の使い手、攻撃力は非常に高い

キュベ・サン・セルジュ1尉24才、通称セルジュ

チームファイヤ小隊長、CG、スクール5期生

エリカの弟、非常に強力な砲撃の持ち主、砲撃の種類も多彩、

ビリーの愛弟子、M16のデバイスを持っている。

セカンドモードはレールガンにチェンジする。

士郎の薦めでお見合いし、ユウコと結婚した。

チームマウント…全員がエマルジョンコレクトSDを使いこなす。
防御力は最強

アヴェイ・ド・レランス1尉23才、通称アヴェイ

チームマウント小隊長、FB、スクール6期生、元生徒会会計

レットのライバル的存在、エマルジョンコレクトSD、御神の剣を使う。

防御に定評がある。

チームフリーダム…はみ出し者ばかりで構成されたチーム、だが有る意味最強。

レニエ・ロシェット1尉23才、通称レット

チームフリーダム小隊長 スクール第6期生

ヴァロットの弟、ポジションはFB

転送魔法、エマルジョンコレクトSDなどの魔法を使う、

格闘術は御式内、御神の剣、御式内一刀剣を使う。

御式内一刀剣で御神の剣と渡り合うほどの使い手

ヴァロットから貰ったバイク（バンディット1250F）を乗り回

す。

ロングアーチ

グリフィス・ロウラン一尉

ロングアーチ小隊長

主に情報処理を担当している。

戦闘時はブラシカの戦況オペレーターを務める。

ルキノ・ロウラン（ルキノ・リリエ）曹長

グリフィスの妻、普段は経理事務をしている。

戦闘時はブラシカの操舵手（アプリリア不在時）をこなす。

アルト・クラエッタ陸曹

完全に行き遅れちゃった人、

普段は業務管理をしている。

戦闘時はブラシカの通信士、

プティ・シッド一等陸士20才

士官学校卒

普段は労務管理が仕事

戦闘時はブラシカの測的手兼砲撃手（アプリリア不在時）

シノン・ピカセ2等陸士19才

高卒、普段は庶務（雑用）係

デバイスマスター3級を所持

デバイスの簡単な修理や調整程度なら出来る。

戦闘時は、オフィスの留守番

108部隊

ゲンヤ・ナカジマ67才

今は良いお爺ちゃん、孫達の面倒を見つつ、お爺ちゃんライフを楽しんでいる。

士郎とは時々将棋を指したりしている様だ。

ギンガ・ナカジマ三佐37才

あれから結婚して3人の子供が居る。

ナカジマ三佐と言えば今はギンガさんを差す。

陸士108部隊部隊長

スバル・ナカジマ35才

本局防災局総務課長、かなり出世しました。

息子レオ10才、娘ハヅキ10才がいる

ヴォルツ・ナカジマ

スバルの旦那、相変わらず防災司令センターの所長をしている。

ノーヴェ・ナカジマ

あれから結婚して二人の子供が居る。

現在第8防災署の防災指令（現場隊長）

ウエンディ・ナカジマ

あれから結婚して3人の子供が居る。

現在第7防災署の防災指令（現場隊長）

ディエチ・ナカジマ

あれから結婚して子供が一人いる。

現在第9防災署の防災指令（現場隊長）

チンク・ナカジマ

108部隊の捜査官の一人、頭脳労働担当。
もの凄く切れる頭で犯人を追いつめる。

スクラティ・ナカジマ(27才)

108部隊捜査官(現場担当)、

108部隊最強の使い手、妹や甥、姪達に御式内と御神の剣を教えている。

EC兵器や、大規模テロに対する切り札、地上のエースオブエースとも呼ばれる。

シャマルがお見合い話を進めている。

ヴィーニャ・御神 (ヴィーニャ・デルマル) 27才

旦那の名前は御神誠二(御神誠の息子)

子供3才と2才が居る。

現在育児休暇中、

キアンティ・クラシコ27才

第8警防署警部

現在結婚相手を探している。

登場人物紹介（後書き）

事件が始まる

プロローグ・ジャヌヴィアの予告状（前書き）

ジャヌヴィアからの予告状が届いた。
ヴィラ、グレイス、出動だ！

プロローグ・ジャヌヴィアからの予告状

「予告状、7月18日夜12時きっかりに英雄の丘美術館から、『人魚の涙』を頂戴致します。怪盗ジャヌヴィア」

7月18日早朝、新聞の折り込みに混じって怪盗ジャヌヴィアからの予告状が473部隊の部隊長、マス・ラヴアルの元に届けられた。

彼は青くなった。

今まで平和で基本的に事件らしい事件もなく過ごしてきた彼に取っては成らない事態、後10年もやれば円満に定年退職出来るのに、事態はそれを許してはくれなかった。

同じ事が美術館でも起きていた。

美術館からも地元の警防署を通じて連絡が来る。

「こうなったら彼女を呼び戻そう」

彼は出勤すると急いで通信を入れる。

それが事件の始まりだった。

そう、彼女は今クラナガンにいた。

スクールの模擬戦大会に参加する為に、473部隊の精鋭を引き連れ今まさに試合に臨もうとしていた。

「業務連絡、業務連絡、チーム473はすぐに本部まで来て下さい」

「ええ？それは本当ですか？」（ヴィラ

「申し訳ないがすぐに戻ってくれ」（473部隊長）

「校長先生、申し訳ありませんが緊急事態が起きました。
不本意ながら試合を辞退して帰投します」（ヴィラ）

「何？それは本当か？分かった、チームウィンドとチームフォレス
トを助っ人に出す、

アプリリアは上空からブラシカで支援、アマネさんもブラシカから
指揮を任せた、俺は大会に残る」（ヴァロット）

「どうしたの？」（なのは）

「たった今エルセアの美術館にジャヌヴィアからの予告状が届いた
そうです」（ヴァロット）

「それは仕方ないわね？」（なのは）

「1年生Bチーム、相手チームの試合放棄により不戦勝とします」
（なのは）

「ヴィラさん、こちらも助っ人を送らせてもらった、現地で落ち合
って欲しい」（ヴァロット）

ヴィラ・エミール執務官、魔力S強さSSを誇る473部隊の切
り札、スクール2期生でもある。

今まさに平和なエルセアに重大事件が起きようとしていた。
盗みを阻止出来なければ、この冬のボーナスはカットされるだろう？
彼女は思う、住宅ローンの返済どうしよう？と……

「数百億有ったらなー？家のローンなんてすぐに返せるのに」（ヴィラ）

ヴィラは2年前に港の見える高台に家を買った。
そのローンが23年残っている。

「この警備は？」（グレイス）

「周りを隊員で囲んで猫の子1匹通さん様にしてある、この美術館の壁はAMF素材で出来ていて、
転送や転移では入ってこられない。窓も同様にAMF処理されているし、はめ殺しだ、明ける事は出来ない」（マス）

「開けられる扉は？」（グレイス）

「トイレの窓と玄関、それから裏口と大型美術品の搬入路の6カ所だ。

既に中と外に二人ずつ隊員を貼り付けてある」（マス）

「展示室の警備は？」（グレイス）

「中をチームフォレストが、外をチームウィンドが行う事で話が付いています」（アマローネ）

「あのガラスケース自体もAMF処理が施してある、S級の転送魔導士でも転送出来んよ、

それに例え電源を切られてもバッテリーで半日は持ち堪えられるようになってるし、

まだバッテリーも交換したばかりだ。万が一にも切れる恐れはない」（マス）

「それに、この囲みを超えると警報が鳴るの、それと同時に犯人を排除するシステムが作動するわ」（ヴィラ

そう、展示ケースを囲むように6本のポール、そして太い綱で囲まれている。

「因みに作動するところなる」（マス

彼がたばこを投げた瞬間だった。

バシユ

レーザー砲が正確にたばこを捉え灰に変える。

そう、この防犯カメラにはレーザー砲が搭載されているのだ。まさに完璧な警備、この警備をかくぐってジャヌヴィアはどうやって宝石を盗もうというのか？

プロローグ・ジャヌヴィアの予告状（後書き）

次回…この警備をかいぐって宝石を盗まれてしまう。

一体ジャヌヴィアはどうやって宝石を盗んだのか？

やっぱり盗まれた(前書き)

11時59分、まだ姿を現さない。
前線司令部にも焦りの色が見える。

「もしかしたら来ないんじゃないか？」 (マス

「いえ、奴は必ず来ます、やると言ったらやる奴なんです」 (グレ
イス

やっぱり盗まれた

「じゃあ、この扉を閉めたら明日の朝まで誰も中に入れないわよ？」

（アマローネ

「えっ？中の警備は？」（ヴィラ

「既に入っています、心配はありません」（アマローネ

そう、スペシャルフォースのチームフォレストは隠密行動部隊である。

滅多な事では人前に姿を現したりしない、そして今回の任務は宝石を守り抜く事、

ジャヌヴィアを生かしたまま逮捕する事である。

扉の外はチームウィンドが交代で警備する。

この厳重な警備の中一体どこからどうやって侵入しようと言うのか？

そして前線司令部（警備室）

「館長さん、この二日以内に搬入された美術品はありませんか？」

（アマローネ

「二日どころかこの一月搬入されていないよ？でも何故？」（館長

「奴は誰にでも何にでも変身出来るんです。

実際この前、欲望の書事件の時は椅子に化けて取引現場に潜んでいました。

椅子とか小物とか美術品とか持ち込んだ物が有れば教えて下さい」

(アマローネ)

「そんな物は持ち込んだ覚えもないよ、あの展示室はこの一月何も入れ替えていないし、

何も変わった所はなかった、客だって殆ど来ないんだここ、管理局の援助がなかったら倒産しているよ」(館長)

そう、英雄の丘の入り口近くに建てられた美術館、中を見学する人は殆どいない。

来る客は殆どが墓参りの待ち合わせの為に利用して居るぐらいな物だ。

その為、結構高価な絵画や彫刻、アクセサリーなどを収蔵している物の、その内容は余り知られていなかったりする。

その内容の大半は裏の丘に眠る英雄達にまつわる物だとか？

「所で、あの人魚の涙は何故狙われたんですか？一体どんないわれが？」(グレイス)

「あのサファイヤは別名悲恋のサファイヤ、有る悲劇によって引き裂かれた恋人の、

女性の方が持っていた物だと伝えられている。

男はこの墓地の上の方に眠っているらしい、任務に失敗し、死亡した英雄の後を追うように海に身を投げた女が居た。

その彼女が身に着けていた宝石こそ人魚の涙だ。

彼女の魂はやがて人魚になってこの海を彷徨っているのだとか？」

(館長)

「許せない、そんな恋人の思い出の品を私利私欲の為に盗むなんて！」(ヴィラ)

「……と言う訳です、部隊長、何か指示はありますか？」（アマロ
ーネ

「その話だったら俺も知っている、漁師の間じゃあ有名な話さ、
実際に人魚を見たって言う噂もある位だ。まあ、それだけ警備が厳
重ならそう簡単に盗む事は出来ないだろう？」

もし出来たとしてもそう簡単には逃げ出す事は出来ない、盗まれた
ら館内から誰も出さない事だ」（ヴァロット

夜の帳が降りる頃、ヴァロット達はそんな通信を交わしていた。
そして長い夜が始まる、夜12時丁度に奴は盗みにやってくる。

それからの時間、長く静かに過ぎて行く筈だったのだが、その緊
張感があつさり破られた。

外が異様に騒がしい、何と信じられない数のマスコミが取材に来て
いる。

どこから情報が漏れたのか？始めはそう思った。

その答えは、ジャヌヴィアが自分自身で犯行予告をマスコミに送り
つけていた。

各報道機関に今日の夕方届くように調整した上で郵送していたのだ。

「報道陣を近付けさせるな！ジャヌヴィアが紛れているかも知れな
い！」（マス

報道陣と警備の局員が睨み合う。

流石にこれは困った。

近隣の部隊にも増援を頼む、万が一空からの襲撃に備える為に航空
魔導士を手配する。

そう、このギリギリのタイミングでこれをやられたら空からの襲撃
は諦めざるを得ない。

これも一つの作戦だったりする。

さあ、この嚴重な警備の中、本当にジャヌヴィアはやって来るのだろうか？

ただ警備しているだけじゃない、報道陣もカメラを回し、ジャヌヴィアの姿を捕らえようと狙っている。

これだけ厳しい監視の中で果たしてジャヌヴィアは盗みを働く事が出来るのだろうか？

時間だけが刻々と過ぎていく、今、夜の10時、予告時間まで後2時間、緊張がどんどん高まる。

緊張感で口が渇く、それと同時にどんどん時間が長く感じられる。それでも予告の時間はどんどん近付いてくる。

ジャヌヴィアは何時現れるのか？相手は売り出し中とは言えかなりの腕を持つ泥棒、

今まで誰がどの様な警備をしようとも予告通りに現れ、そして盗んでいった。

その予告を破った事など一度もないのだ。

12時きっかりに盗むと言った以上、必ず12時きっかりに宝石が消える事になる。

そうなればその5分前には姿を現さないと盗む事など到底不可能だ。一体何時どこから現れるのか？全く見当が付かない。

警備している方から言わせるとこれは相当厄介な事だ。

一方ジャヌヴィアから見ればこれは楽しいお遊びなのだ。

警備の局員を手玉に取り、小馬鹿にする。

その上で盗んで見せてそれをマスコミにアピール、

管理局の評判を落とすには最高のやり方だったりする。

そして時間は流れて11時50分、もうそろそろ限界時間の筈、

局員達の緊張も最高潮に達する。

それでもなかなか現れない。

時間だけが刻々と流れる、そして5分前、まだ姿を現さない。
1分、2分、時間が流れる。

11時59分、まだ姿を現さない。
前線司令部にも焦りの色が見える。

「もしかしたら来ないんじゃないか？」（マス

「いえ、奴は必ず来ます、やると言ったらやる奴なんです」（グレ
イス

後30秒、20秒、10秒、9、8、7、6、5、4、3、2
その瞬間だった。

ポンッ

展示ケースの付近で白い煙が上がる。

その白い煙がケースを通過した瞬間、中の宝石は消えていた。

チームフォレストは我を疑った。

AMFケースの中の物は転送で盗み出す事は不可能だ。

ケースを開けて直接手にしない限り持ち出す事は出来ない、

それに例え煙に化けたとしても中の物を盗み出すなんて不可能だ。

それはまるで魔法か手品だ、4人の隊員が見守る中でそれは確かに
起きた。

どうやったか分からないが、一瞬で盗まれた。

姿を見せることなく盗んで見せたのだ。

それにこの煙は本物だった。

匂いからして火薬の煙だった。

その火薬の煙が天井に達して火災報知器の非常ベルが鳴り、消化センサーが火元を捜して消化剤を撒こうとする。

そのベルで盗まれた事が外の報道陣にもばれてしまう。

「一体管理局は何をやっていたのでしょうか？
これだけの人員を使いながらまたジャヌヴィアに美術品を盗まれてしまいました」

始まった報道は管理局叩きだった。

また今回もやられた、そして明け方の会見でマス・ラヴァル部隊長を始めとする捜査本部一同が頭を下げる。

そこにはマスコミの酷い罵声が浴びせかけられた。

でも、公開された映像を見るにどうやって盗み出したのか？さっぱり分からなかった。

どうやって消えたのか？何処へ消えたのか？TVに出てくるコメントーターも謎が解けずにいた。

犯罪分析の専門家やら、転送魔導士やら、はたまた鍵師と言った人たちまで呼び集めて謎解き番組を始めた。

でも、公開された映像からはその謎を解く事が出来なかった。

3人を除いては……

やっぱり盗まれた（後書き）

次回…事件の解決編です。

ジャヌヴィアはどうやって盗んだのか？

このトリックが分かった人、感想のコーナーまでご連絡下さい。

正解者には何の賞品も出ませんが、漏れなくお褒めの言葉があります。

なお、明日はトリックの種明かしです。

既にUPしてあるので明日の17時を楽しみにして下さい下さい。

ネタって言うのは、ばらされて見れば意外と簡単な物だ（前書き）

ポンッ

台座の下から煙が吹き出す、その煙が立ち上り展示ケースを通過した瞬間、

人魚の涙に見立てられたネックレスが消えて無くなる。

まさにあの映像の通りだった。

ネタって言うのは、ばらされて見れば意外と簡単な物だ

「部隊長申し訳ありません、やられました」（アマローネ

翌朝早くヴァロットとアマローネは通信を交わす。

「それでもまだ現場には誰も入れてないんだろ？」（ヴァロット

「それが、既に報道陣に公開してしましまして……」（アマローネ

「じゃあ報道陣は？」（ヴァロット

「いましがた引き上げました」（アマローネ

「まったく、完全に逃げられたな？ 恐らく奴は報道陣に紛れて出て行ったぞ？」（ヴァロット

「ええ？」（アマローネ

「奴は盗んだ後も逃げられずにいたんだ、そして報道陣が入ってくるのを待っていた。

後は報道陣に紛れて出て行けば問題ないからな？」（ヴァロット

「じゃあ部隊長はあの盗みのトリックが分かったと？」（アマローネ

「あれか？ あんな簡単なトリックは見破られるだろう？

奴の能力を考えれば簡単な物だ。展示ケースの台座を調べてみる、無くなっている部品に奴は化けていたんだ、後で再現して見せてやる」（ヴァロット

ヴァロットは既に見抜いていた。

ジャヌヴィアの使ったトリックを、それが分かれば至極簡単な方法なのに、

まだそれに気付かないで居る連中が殆どだ。

「うっ、バッテリーがない」（グレイス

ヴァロットの指摘したとおりだった。

そう、この展示ケースは台座も含めて結構空洞が大きい、そして作ってある素材自体はAMFでも内部に入ってしまったえば関係なく魔法が使える。

「もしかしてバッテリーを交換したのって三日前じゃあないですか？」（グレイス

「その通りだ」（館長

そうジャヌヴィアは予告状を出した後バッテリーに化けてここに組み込まれていたのだ。

そして予告時間通りに盗み出し、また台座の中に隠れる。

そして報道陣が入ってきた時、台座から抜け出して報道陣に紛れて脱出、

完璧に逃げおおせてしまった。

実は報道陣に予告状を送ったのはこの脱出の為だったのだ。

更に調べると展示ケースと台座を隔てる板が削られて穴が開けられ、その上の布にも切れ目が入れられていた。

そう、ジャヌヴィアはここまで準備した上で決行の瞬間を待っていたのだ。

考えてみればそのトリックは簡単な物だった。

ただ、余りの早業にみんな引っかけただけの事だ。

あの煙は盗み出すその瞬間を見られたくないから火薬を使っただけの事で、

単なる目眩ましでしかなかった。

「申し訳ありません、あんな簡単なトリックに引っかけるとは思っても依りませんでした」（アマローネ）

「もう現場検証は終わったんだろう？ 引き上げて良いぞ、後は盗まれた宝石を取り返すだけだから？」（ヴァロット）

その日のお昼そう連絡を交わした二人だった。

夕方チームフォレストとチームウィンドが帰還する。

「疲れている所済まないが今から奴の取引現場を押さえる。

既にチームフリーダムが張り込みに行っている、交代はチームフォレスト、

チームウィンドはバックアップだ。アプリリアは上空からブラシカで支援せよ、

クラナガンの守りはチームファイアだ、出動！」（ヴァロット）

出動先はクラナガンから西南西に150km、山の中に立つ1軒の屋敷だった。

ここ主人、クレマン・ド・ブルゴニユは闇の世界では知られた盗品オークションの主催者だった。

「どうだ？ 動きは？」（ヴァロット）

「今の所無いですね？ 奴が来るのを待っているのでしょうか？」（レ

ット

「良し、チームフォレスト中に潜入せよ、今回は全員逮捕だ、ジャヌヴィアに関しては手足の1〜2本切り落としても構わん、痛い目を見せてやれ、チームウィンドとチームフリーダムはは突入用意、

雑魚が多い場合はこいつらを全て打ち倒して逮捕せよ」(ヴァロット

日が沈み、夜の帳が降りる頃、館の主人は自分の部屋の窓を開け放つ。

そこへ飛んできたのは1匹のコウモリだった。そして姿が変わる、そうジャヌヴィアだった。いつもの山高帽にいつものタキシード、そしてマントと仮面、どおやらこれがジャヌヴィアの真の姿のようだ。

まずは通信デバイスを取り出すと決済をする。

そして、懐から取り出したのはあのネックレスだった。それを手渡した瞬間だった。

クレマンがネックレスを握りしめたまま倒れる。

そう、チームフォレストの隊員が峰打ちを入れていた、そしてジャヌヴィアにも後ろから一撃振り下ろされる。

それをひらりとかわすジャヌヴィア、相当に出来る。

でも交わした先にまた現れる隊員、全部で4人いた。

完全に囲まれたジャヌヴィア、それでもまだ余裕があるようだ。

ポンッ

ジャヌヴィアがステップを踏んだ瞬間、靴の裏から白い煙が……その瞬間既にジャヌヴィアの姿はなかった。

「ああ、これでカット率が少なくなって良かった」（ヴィラ

「あのまま闇オークションに流れていたら冬のボーナスはなかったかも知れん」（マス

「部隊長恐ろしい事を言わないで下さい、まだローンに苦しんで居るんですから」（ヴィラ

そしてヴァロットはTVに出演する、あのトリックを再現する為に……

そこには二つの展示ケースが用意されていた。

ポンッ

台座の下から煙が吹き出す、その煙が立ち上り展示ケースを通過した瞬間、

人魚の涙に見立てられたネックレスが消えて無くなる。

まさにあの映像の通りだった。

次に中を見えるようにした台座、そして展示ケース、中には首元までの胸部マネキンがネックレスをしている。

そのネックレスには留め金の所と宝石部分に釣り糸が結わえ付けられていた。

「そうだ、この台座に潜んだ後、小さな蜘蛛に化けて上の展示ケースに侵入したんだ。

そして極細の釣り糸、恐らくはメタルラインの0.02号辺りを使っただろう？

細すぎて30センチも離れれば見えないからな？

それを結んで準備は完了だ」（ヴァロット

そう始めから首の後ろの留め金は外され糸を引けばいつでもネックレスは外れる状態だった。

アプリリアが糸を引くとネックレスが外れ下に滑り落ちる。

更にもう一本の糸を引く事で布の切れ目から台座の中へ落ちて来るというトリックだった。

やられてみると至極簡単、ただ誰もそれに気が付かなかったただけだった。

この瞬間を見られたくないから、煙を使ったのだ。

「そう、奴は始めからここに潜んでいたんだ。

そして報道陣と共に脱出した、マスコミにも責任があるんだ。

ジャヌヴィアの逃走を手伝った責任が……」(ヴァロット

「なんだよう、せっかく見抜いたのに、せっかく小説のネタになると思ったのに！放送するなよ！」(ユーノ

「ふっ、俺以外に見抜いている奴が居ようとはな？流石ヴァロットだ」(バローロ

ヴァロットにジャヌヴィアの逃走を手助けしたと指摘されたマスコミは、直後から管理局叩きをしなくなった。

結局、自分達もジャヌヴィアに踊らされていたのである。

しかし、ジャヌヴィアとは一体どんな人物なのか？

その正体は男か女か？どんな顔をしているのか？

ネタって言うのは、ばらされて見れば意外と簡単な物だ（後書き）

また次のネタを考え付いたら書きます。

それまでは暫く時間がありますので待っていて下さい。

ジャヌヴィアと夏休み（1）（前書き）

「ハア、夏休みどうしよう？ お金ないし」（グレイス

彼女はジャヌヴィアに合わせて夏休みを取るしかなかった。

「どっかでリゾートしたいんだけどな……」

（ん？ リゾート？ そうだ良い事を思い付いた！）

彼女はニヤリと黒い笑いを浮かべる。

ジャヌヴィアと夏休み（1）

「予告状、私ことジャヌヴィアは8月一杯リゾートします。仕事はいたしません、よって私からの予行状が来たとか抜かした奴は全て偽物です。」

私を語る馬鹿者共が居たら、9月に入って吊し上げます、では管理局の皆様ごきげんよう、マスコミの皆さん、また協力して下さいね？それからファンの皆さん休みはしっかり遊びましょう」

などとふざけた予告状が送られてきた。それはインターネットやあらゆるメディアを通じて次元世界の至る所にばらまかれた。

「ふ、ふざけやがって、こっちはボーナス削られてもの凄く苦しいのに、

一夏遊び倒すだとおおおおおお？許せん！今度こそ逮捕だ！」

と息巻いているのはグレイスだったりする。

でも、実際の所、ジャヌヴィアはやると言ったらやる人間、それが遊び倒すと宣言している以上、ジャヌヴィアがらみの事件は起きそうにない。

「ハア、夏休みどうしよう？お金ないし」（グレイス

彼女はジャヌヴィアに合わせて夏休みを取るしかなかった。

「どっかでリゾートしたいんだけどな……」

（ん？リゾート？そうだ良い事を思い付いた！）

彼女はニヤリと黒い笑いを浮かべる。

「何だね？これは？」（捜査四課長

「はっ、ジャヌヴィアをリゾートで逮捕すべく、めばしいリゾートをパトロールしたいと思います」（グレイス

「夏休みはどうするんだね？」（捜査四課長

「その内纏めて取らせて頂きます」（グレイス

「仕事熱心でよろしい」（捜査四課長

グレイスは心の中で舌を出す。

仕事する気はさらさら無い、それぞれのリゾートに二泊三日、リゾート巡りがしたいだけだった。

しかも全ての資金は捜査経費の中から出る。これなら自腹は大したことがない。

それに昨日新しい水着も買ってきた。有給休暇とお金を節約しつつ、この一ヶ月をリゾートで過ごすまさに完璧な作戦、許可は下りた、後はそれを実行に移すだけだ。

出来ればリゾートで男の一人も捕まえられたら最高だと、そんな事を考えていた。

でもまだ彼女は知らない、それがとんでも無い大冒険になる事を、ジャヌヴィアを巻き込んで、大事件に発展する事などまだ知る由もなかった。

表向きはジャヌヴィアの搜索、でも実態はお仕事という名のリゾート

ト、彼女の頭にはそれしかなかった。

八月一日、彼女は捜査の為に本局を出発した。

まずはミッドチルダ屈指のリゾート地、ワイハ諸島から

ホテルは捜査経費の為余り高い所には泊まれない、でもそこその部屋が押さえてある。

そして彼女はパトロールという名目でビーチに繰り出した。

「まあ実際に顔も名前も知らない訳だし、こう言う所では楽しまいとね？」（グレイス

そう、よく考えれば誰もその顔を知らない訳で、どうやって見つけるのか？

それさえ分からない、そのことに気が付いていない課長だったりする。

ただ分かっている事はかなり華奢な体をしている事、背もそれほど高くない事だった。

スペシャルフォースの捜査資料からは、相手の大凡の背の高さ、線の細さ、

現場の絨毯から採取した足跡から体重などが割り出されていた。

「身長は一六〇センチ前後、体重は五〇キロ前後、男ならかなり華奢ね？女なら私ぐらいか？」（グレイス

そう言う身体データに基づき彼女はビーチを見渡す。

「あ、かなりの美少年発見！身体データには合致するけど、まさかあんな子供がねえ？

それよりああ言う子をP〓〓してP〓〓をP〓〓してみたい……」

（グレイス

（いかん、思わず願望を口走ってしまった。いつの間にか山田が感染っている）（グレイス

気を取り直してお仕事……どうも遊べない体質らしい。

「意外と身体データに合致する人って少ないのよね？」

女性の場合プロポーション良すぎるとそれなりに線が太くなるし、逆に無いともっと細いし体が小さいからもっと体重が軽くなるのよね？」（グレイス

そう言う目で見てみると意外と篩に掛けられる。

候補者は殆ど男性だ。しかも華奢で可愛い美少年ばかり、半分以上グレイスの趣味が入っていたりするが……

それでもいつの間にか仕事モードに入ってしまうグレイス、まあ仕方がない。

建前はお仕事出来ているのだ。

（どうする？ いっそうの事逆ナンしてみるか？）

そう考えつつも彼女は候補者達を注意深く観察する。

（あ、あの子は家族いるんだね？ 候補から外れた。）

そうやって一人ずつ候補から外していく、まあいきなりジャヌヴィアが見つかるとは思っていない。

ただ、そうやって篩に残った候補に声を掛けてみようと言うのだ。

（あの子とあの子とあの子は友達だったんだね？ 仲間に来ていたの

か？一気に三人外れたね？」

だんだんと候補者が消えていく、残り二人、と思っていたら一人は妹らしき女の子が呼びに来た。

家族が居るらしい、残り一人か？夕方まで待ってそれでも一人だったら声を掛けよう、

明日も一人だったらホテルの部屋まで行ってみよう、その後は……つい美少年を押し倒してしまう妄想が頭を離れない。

どうも山田ウィルスが妄想を危ない方向へ持って行こうとする。

「やっぱりやるしかない！今夜押し倒す！」（グレイス

とうとう山田ウィルス全開、彼女はやばい妄想の世界と行き来しつつ彼を観察する。

でもやっぱり可笑しい、友達が居るでもなく、家族もやってこない、どう見ても一人だ。

もうすぐ夕方、ビーチは随分人が減ってきた。

彼はただ波と戯れ、誰に声を掛けるでもなく一人で居た。

周りを見渡せばもうかなり人が少ない。

これはチャンス！もう誰も彼女を止められない。

「ねえ、君ちよつと……」

グレイスは思い切って声を掛けた。

ジャヌヴィアと夏休み（1）（後書き）

次回..とうとう彼の部屋に来てしまったグレイス、そして……

ジャヌヴィアと夏休み（2）（前書き）

ジャヌヴィアを見つけるといふ名目でリゾートにやってきたグレイス、

そこでかなりの美少年を見つかる。危ない妄想が彼女の頭を支配する。そして……

周りを見渡せばもうかなり人が少ない。

これはチャンス！もう誰も彼女を止められない。

「ねえ、君ちよつと……」

グレイスは思い切って声を掛けた。

ジャヌヴィアと夏休み（2）

「ねえ、君ちよっと……」

グレイスは思い切って声を掛けた。

「は？ 僕の事ですか？」

「そう、あなたよ、見たところ一人みたいだけど、ご家族は？ 彼女はあるのかしら？」

「……居ないですよ、一人です」

「そう言うお姉さんは？」

「うっ、独り者よ、ここにはナンパされに来たの！」

「所謂リゾバって奴ですか？」

「そう言う突っ込みを受けるとは思わなかったわ、でもそんな物よね？」

「でも何故僕に声を？」

「だって誰も声を掛けてくれないんだもん！ 寂しいじゃない」

（この人ただやりたいただけじゃあ？）

「でね？ 何処に泊まっているのかなって？」

「Rホテルの607ですがそれが何か？」

「嘘？私603……四つ隣の部屋じゃない？ねえ、今夜遊びに行ってもいい？」

そしてホテルまで一緒に帰ってくる。

（やった、最高の上玉だ！今夜は私が滅茶苦茶にしてあげる！）

作…ダメだ完全に壊れている。最早山田ウィルスの独壇場か？

「避妊薬は飲んだ……勝負下着良し！」

準備万端、後は押し倒すだけ！もう戦闘態勢のグレイスだった。そして甘めの白ワインを片手に少年の部屋へ……

「……所でお名前は？」（グレイス

「僕はカール、カール・ス・バーグって言います、お姉さんは？」
（カール

「私はグレイス、グレイス・甲州って言うの、祖父が地球出身なの」
（グレイス

「何か聞き慣れない名前だと思ったらそう言う事ですか？」（カール

「ねえカール、あなたみたいな子が何故ここに一人で来ているの？
ご家族は？」（グレイス

「その言い方酷いです、僕こう見えても21です、まだ成ったばかりだけど……」(カール)

「嘘？14と15才にしか見えなかった」(グレイス)

「知り合いにもよく言われるんですよ、ガキって」(カール)

「じゃあご家族は？」(グレイス)

「家族は居ません、孤児なんですよ、一時期はスクライア一族に厄介になってました。

あの頃はカール・リシュブール・スクライアって名乗ってましたけどね？

今は昔の名前に戻したんですよ、拾われた頃の名前にね？」(カール)

「じゃあ、一族をやめちゃったんだ？」(グレイス)

「まあ、やめたと言うか飛び出したと言うか、そんな感じです」(カール)

(しまった、避妊薬飲むんじゃないかった、

子供作ってそれを盾に結婚を迫った方が良かった) (グレイス)

(作…女って怖い……)

「今は何をしてるの？どうしてここへ？」(グレイス)

「今は気ままに世界中を旅しながらトレジャーハンティングしてます。

まあ、この前良い金になったお宝があったんで暫くはリゾートしよ

うかなくて？」（カール

「ふーん、やっぱりスクライア一族だね？お宝探しとかする辺りがさ、

ねえ、飲めるんでしょ？良かったら飲まない？」（グレイス

そう言ってさりげなくワインを勧める。

ついでにルームサービスで軽いおつまみも取ったりする。

なにげにワインを手渡すグレイス、でもそれはただのワインじゃない。

それには崔淫剤が混ぜてある。グラスに注ぐ時こっそりと混ぜたのだ。

もう仕事より押し倒す事しか頭になかったりする。

「所でお姉さんは何をやってるの？」（カール

「武装局員よ？まあ安月給で戦うのがお仕事、

たまにはこう言う所で息を抜かないとやってられないわよ」（グレイス

「ってことは魔導士なんだ？」（カール

「そうよ、強くなってくると男も寄り付かなくなるし、

彼が出来ても長続きしないのよね？」（グレイス

「そうなんだ？」（カール

「ね、もっと飲まない？このボトル開けちゃいましょう？」（グレイス

そう言ってどんどん奨める。勿論崔淫剤を混ぜて……

暫くして彼の顔が赤くなってくる、それだけじゃあない息が荒くなり出した。

そして股間を押さえてもじもじし出す。

（こ、この女酒に何か混ぜやがった）（カール

効いてきたな？それでもうあなたは私の物よ！）（グレイス

主導権を握るグレイス、事は計画通りに進んでいる。

「ねえ大丈夫？顔が赤いわよ？」（グレイス

そう言って彼のおでこと自分のおでこをくつつける。

そう、こうすれば顔から胸元がドアップだ。

更に彼を興奮させられる。効果は大きかった。

彼の緊張が最高潮に達した所で唇を奪う。

そして彼の頭を胸の前で抱き締める。

その瞬間、彼の中で何かが切れた……

ジャヌヴィアと夏休み(2) (後書き)

次回…グレイスに犯されてしまうカールくん、所でジャヌヴィアの
出番はあるのだろうか？

ジャヌヴィアと夏休み(3) (前書き)

カールくんの誘惑に成功したグレイス、もうこれはやるしかない！
所でジャヌヴィアはどうした？

ジャヌヴィアと夏休み（3）

彼の緊張が最高潮に達した所で唇を奪う。

そして彼の頭を胸の前で抱き締める。

その瞬間、彼の中で何かが切れた……

いきなり抱きついて腰を振ろうとする。

「ダメよ、がつついちゃ、ベッドに行きましょ？」（グレイス

（やった、完璧に落ちた……）（グレイス

脱がせてみると華奢な体は何ともそそる。

お互い裸になればもう言葉はいらない。

（作者…すいません暫く割愛します）

「ああああ！凄いいいいいいいいいいい！」（グレイス

「で、出るうううううううううううう！」（カール

二人ががつくりと崩れ落ちる。

「はあああ、あなた凄いいじゃない、体の割に凄く良い物持ってる！」
（グレイス

「そ、それはどうも、でも、その、これが初めてな物で、良いのか悪いのかさっぱり分からなくて……」（カール

（何？チェリー頂いちゃった？ラッキー！）（グレイス

「だったらもう一回！私がもっと凄い事を教えてあ・げ・る」（グレイス

そう言ってカールをまた押し倒す。
それから1時間……

「も、もうダメ……」（カール

流石に体力が持たない様だ。

「凄いわよ、初めてでここまで満足させてくれるなんて……」（グレイス

今回の捜査は別の意味で当たりだった。
こんな可愛い彼を抱く事が出来たのだから……

「ねえ、あなたいつまでここにいるの？」（グレイス

「まだ未定です、取り敢えず飽きたら何処か別の所へ行こうかなって……」（カール

「良かったら、私といろんな世界のリゾートを回って見ない？」（グレイス

「面白いですね？」（カール

「私は明後日のお昼の便で次の目的地に行くから……」（グレイス

そしてグレイスは彼の部屋を後にした。

「さてと、髪の毛と体液の採取に成功つと」（グレイス

（作…女ってつくづく怖ええ）

そう、このサンプルはすぐにカプセルに入れられて、本局の鑑識課に送られる。

そしてプライバシーに十分配慮した上で解析作業が行われる。

まだ、ジャヌヴィアの髪の毛など遺伝情報は手に入っていない、でも現場から採取された複数の髪の毛や汗の跡など、

DNAの採取出来たサンプルは数限りなくある。

もしこの捜査期間中に集めたサンプルに、現場から採取された物と一致する物が有れば、

それがジャヌヴィアという事になる。

そう彼女は唯一ジャヌヴィアの素顔を見た人間という事になるのだ。

それに今日の収穫は大きかった、可愛い燕を捕まえられた。

これで暫くの間は寂しい思いをしなくても済みそうだ。

（流石に子供を作るのは不味いか……夏が終わっても付き合ってくれるかどうか？聞いてみよう？

付き合ってそれから子供を作ったって遅くはないし……）

そして彼女は今日もジャヌヴィア探しを始める、もしジャヌヴィアなら確実に独り者だし、

人と関わり合う事を避けるだろう？

そうやってあちこちのビーチを廻りながらこれだと思う人物の髪の毛を採取する。

中国拳法を学んだ彼女にとって相手に気付かれない様に髪の毛を採取する事は朝飯前だ。

そして上手く名前を聞き出したりしている。

流石に鑑識課、この時期でも完全には休みにならない、交代で休みを取りつつ仕事は続いている。

そして少しずつグレイスからのサンプルが届き始めていた。

「なるほどなあ、そう言う事か？」（捜査4課長

課長もグレイスの取った作戦に感心している。

その時は気が付かなくても、顔と名前とDNAが分かっしまえばもう捕まえたも同然だ。

後は指名手配して、搜索すればよい、それに賞金を掛けたって良い、ジャヌヴィアほど有名ならかなりの高額賞金になるだろうし、賞金稼ぎも喜ぶだろう？

既に顔が分からない状態でも、有力情報者に1000万の賞金が付いている。

恐らく億単位の賞金首になる事は間違いない。

追われる者にとって見ればこれはプレッシャーだったりする。

何時、どこから狙われるのか？さっぱり分からないからだ。

常に緊張を強いられる。安心して眠る事さえ出来なくなる。

それから一週間、彼女たちはリゾートを満喫していた。

昼間はお互い別行動、夜はホテルで毎晩の様に楽しむ生活を送っていた。

「どうだね？解析作業の方は？」（捜査4課長

「はっ、最初のグループが後数日有れば終わります。解析自体は終わって居るんですが、

今は照合作業と身元確認作業に手間を取られています」(鑑識員

「まあ、焦る事はない、8月一杯までに何とかなれば、全ての鑑識作業が9月一杯に終われば良いんだ」(捜査4課長

それから2週間、どうにも奇妙な事が分かってきた。

どうしても身元が不明なDNAがある。

いや、身元は分かったのだが、それがここにある事自体可笑しかった。

「カール・リシュブール・スクライア、22年前に18才の若さで死亡？」

遺跡のトラップに引っかけて命を落とす？」(捜査4課長

「ええ、DNAは完全に一致しています。本人以外にあり得ない事です。

有るとすればプロジェクトF以外にあり得ません、

それから、カール・リシュブール・スクライアの素性ですが、

スクライア一族の次期族長と目されるほどの実力者だったようです。

多彩な変身制御と、幻術、そして亜空闘殺法の使い手です」(鑑識員

「亜空闘殺法？」(捜査4課長

「ええ、スクライア一族でも特定の実力者にしか伝えられない特殊な体術です。

遺跡内のあらゆるトラップ攻撃を防ぎ、あらゆる危険から身を守る為に磨き上げられた体術、

場合によっては暗殺に悪用した者さえ居るという幻の体術です」
（鑑識員）

「でも、トラップに引っかかって死亡したと？」（捜査4課長）

「ええ、どんな達人でも一瞬の気の緩みが命取りになる事はありません」
（鑑識員）

事態は怪しい方向へ動き出した。

ジャヌヴィアと夏休み(3) (後書き)

次回…二人の恋の行方は？ジャヌヴィアの正体は？

ジャヌヴィアと夏休み（4）（前書き）

死んだはずの人間が現れた。

それは何とカールだった。そんな事とはつゆ知らず恋人気分の二人、運命が残酷に二人を引き裂こうとしていた。

ジャヌヴィアと夏休み（4）

それから三日後の事だった。

「課長、例のDNAと欲望の書事件の取引現場から採取された髪の毛のDNAが一致しました。

カール・リシュブール・スクライアこそが怪盗ジャヌヴィアです！」

（鑑識員

「やはりか！グレイス君は大金星だぞ！これであの忌々しいジャヌヴィアを逮捕出来る！」

すぐに彼女を呼び戻さんとな？」（捜査4課長

その日のお昼、彼女は信じられない通信を聞いた。

「えっ、帰還命令ですか？」（グレイス

「ああ、ジャヌヴィアの正体が特定された、今すぐ君の持っている画像データが欲しい。

もう捜査の必要はないんだ、今すぐ帰還したまえ！」（捜査4課長

最初課長からの通信が入った瞬間、怒られるかと思った。

多分作戦がばれたのだろうと、ところが大金星だと言われ、

有力すぎる情報に1000万所か1億の賞金を出してくれるという。今まで削られまくったボーナスに熨斗のしを付けてもまだ利かない凄い金額。

流石に困った。

これ以上ここに滞在も出来ない、後一週間遊び倒す予定だったのに、

彼とこれ以上一緒にいる事も叶わなかった。

でも、ジャヌヴィアを逮捕すればまた付き合える、

そんな楽観的な考えを持って彼女は帰還する事にした。

今、お昼過ぎ、彼は何処かへ出かけているし、連絡も取れない、お互い昼間は連絡しない方がよいから、

それにグレイスもその方が動きやすかったからそうしてしまった。連絡先と連絡方法ぐらい聞いておけば良かった。

「ごめんなさい、急に仕事が入ったので先に帰ります。これが私の連絡先です。いつでも連絡して下さい、グレイス」

彼の部屋のベッドの上に書き置きだけを残してグレイスは帰っていった。

それが永遠に二人を引き裂く運命だとも知らずに……

「グレイス捜査官ただいま帰任しました」（グレイス

「ご苦労、お陰でジャヌヴィアの特定が出来たよ、もうこれで捕まえたも同然だ。」

すぐに画像をくれないか？」（課長

彼女は左の中指にしていた指輪を外す。

そう、これはストレージデバイスだった。

その中にはジャヌヴィア候補者の写真が入っている。

彼女は候補者と目した人間の写真データも取っていたのだ。

そう、指輪に埋め込まれた極小さな宝石はレンズだった、そして見た人物を写真として残していた。

すぐにデバイスごと鑑識に回された。

「明日、捜査会議を行う、今日は帰ってゆっくり休みなさい」（課長

そして彼女は翌日地獄を見る事になる。

その夜彼は連絡してこなかった……

翌日、捜査本部……

グレイスはそこに部外者が居る事に不信感を抱きながら席に着いた、分厚い捜査資料に目を通してながら愕然とした。

怪盗ジャヌヴィア

本名…カール・ス・バーク又はカール・リシュブル・スクライア
年齢21才、身長159センチ50キロ、痩せ型、

なお、本物のカール・リシュブル・スクライアは22年前に死亡、
恐らくカール本人のプロジェクトFではないかと思われる。

そう昨日の朝まで一緒にいた人間がジャヌヴィアだった。

まさかカールが怪盗ジャヌヴィアだったなんて……

グレイスの幸せな夢は木っ端微塵に打ち碎かれた。

そう、最初はジャヌヴィアかも知れないと思いながらも彼を抱いてしまった。

その後は毎晩の様に彼と情事を重ねた、二人はいつの間にか恋人になっ

ていた。
それなのに大好きだった彼がまさか……

目の前が真っ暗になった。それ以上に不味い事がある。

ジャヌヴィアと情事を重ねてしまった事、もしばれたら自分も逮捕されるかも知れない。

幸い、万が一の事を考えて彼の部屋にはデバイスの類を持ち込まない様にしていた。

情事を重ねたのは彼の部屋だし、写真は最初の2枚以外撮っていないはず、

ばれる事が恐ろしい、どうやって自分の保身を図るか？彼女はそれを考えていた。

（早い事見つけ出して始末を着ける、余計な事は喋らせない）

それが彼女が下した決断だった。

女というのは本当に恐ろしい生き物だ。

いざと成れば平気で男を切り捨てる、彼女は修羅になった。

会議が始まる直前から恐ろしいほど部屋の空気が冷たい。

もの凄い殺気が部屋を包んでいた。

勿論その中心にいるのはグレイスだ。余りの殺気に周りの捜査官がドン引きする。

「では会議を始める。まずは怪盗ジャヌヴィアの正体だが、資料に有るとおり、

ジャヌヴィアはカール・リシュブール・スクライアのプロジェクトFである。

故人に配慮し、この名前は表には出せない。

カール・ス・バークという名前で手配書を作成する事にした。

顔写真もこれで行く。異論は？」（課長

「随分可愛い顔をしているわね？まだ子供じゃない？」

「確かにまだガキだ、こんな子供に遊ばれていたのか？」

「でも年齢を見ると21だぜ？もう大人だ」

「だけどプロジェクトFとなると次元航行隊の範疇だな？俺達の手を外れる」

その言葉に愕然とするグレイス、困った事になってきた。

「所で、本当にカール・リシュブール・スクライアは死んだのですか？」

「それについてはワシが説明しよう」

この場にいる事も場違いな老人が口を開いた。

ジャヌヴィアと夏休み（4）（後書き）

次回..語られるカールの過去、そして捜査方針が決定する。

ジャヌヴィアと夏休み（5）（前書き）

語られるカールの最期、だとすると裏切り者はスクライア一族の中にいるのか？

それとも部外者なのか？

ジャヌヴィアと夏休み(5)

「所で、本当にカール・リシュブール・スクライアは死んだのですか？」

「それについてはワシが説明しよう」

この場にいる事も場違いな老人が口を開いた。

「ワシの名はリシュブール・スクライア、カールの養父だ」

その一言に誰もが言葉を失った。

「あの子はワシが育て鍛え上げた。そして最期を見届けたのもワシだ」

そうこの人はリシュブール・スクライア、カールの養父であり、今は一族を束ねる長だった。

サシャーニュ族長が亡くなってから彼が一族を率いている。

「あの時、もしあんな事無ければ一族の長はカールが継いでいただろう？」

あの子はそう言う能力に誰よりも長けていた」

スクライア一族は、基本的に徹底した能力主義で、

例え族長の実子でも族長を継げるとは限らない。

そうやって今まで一族を守り通してきたのだ。

一族に常に優秀な血を入れ、常に高いレベルを保つ事、
そうやって一族は滅びることなく今までやって来られた。

「もう一人一族の期待を背負った子供が居たんだが、彼は子供時代にいきなり婚約して一族を出てしまった。彼がいれば一族はここまで危機に瀕する事はなかったのだが、お陰でワシは未だに引退できんよ」

寂しそうに笑った彼の表情は誰の心にも焼き付いた。

「あの日……あの遺跡の側にキャンプを張った我々は、すぐに遺跡の調査に入った……」

随分トラップの多い遺跡で、最深部に辿り着くのに苦勞させられたよ。

だが、我々は遺跡の調査に氣を取られて一族全てに注意が行っていなかった。

氣が付いた時、一人の子供が遺跡に迷い込んでいた。

そしてカールはその子を助ける為に、自らの命を引き替えにしてしまった。

落ちてきた天井に押し潰されて、カールは死んだんだ。

遺体は一族の掟に従い私が荼毘に付して埋葬した。

墓の場所は私以外に知らないはずだ。

だから、カールが生きている事自体あり得ない」

「そんな、じゃあ、あのカールは、ジャヌヴィアは何者なんですか？」
（グレイス）

「残念な事だが、写真を見る限りあの日のカールと瓜二つじゃ、いや、ワシにはあれがカールだとはつきり分かる。

プロジェクトFという技術、もしそれでカールを複製したというのなら、

あのカールを生かしておく事は出来ん、一族の秘技を悪用させる事

は許されない事じゃ」

族長の目に怒りが見て取れる。そう一族の中でも許された者にしか伝えられない奥義、

それを悪用する事は許されない事、悪用すれば掟に従い暗殺される。生きている事さえ許されない。それがスクライア一族の掟だった。

「でも、そうすると一族の中に裏切り者が居るという事になりますね？」（グレイス

そう、カールの遺伝子を何らかの形で持ち出した者が居る。

そしてそれを悪用しジャヌヴィアを作り出し、そして彼に悪事をさせている。

そんな裏切り者が一族の中にいる。

「そんな馬鹿な？あの秘技は一族の中でも選ばれた者、

秀でた能力の持ち主でそれなりの人格者でない限り絶対に伝授を許されない事、

それにそれをマスターするには相当の修行期間が必要になる」

「その必要はないと思います。これはあくまで仮説ですが、

もし、ジャヌヴィアに生前の記憶がある程度残っているとしたらどうでしょう？

私はスクールにいる頃、土郎先生にこう教えられました。

肉体に刻んで覚えた事は例え記憶を失ったとしても体が覚えていると、

それは遺伝子にまで刻まれていると習いました。

もし本当にそうなら、彼の遺伝子さえあればその秘技を手に入れる事は難しくないと思います」（グレイス

それはまさに目から鱗だった。

一族の中でも極限られた者だけに向けられていた疑いの目を一族全体に向けなければならなくなった。

そして、それ以上にジャヌヴィアを許しておく事が出来なくなった。今スクライア一族は崩壊の危機に瀕している。

早く裏切り者を見つけ、ジャヌヴィアを始末しない限り、一族存亡の危機に瀕している。

「ジャヌヴィアは逮捕ではなく、殺害でお願いしたい、出来れば細胞の一片たりとも残さない様に確実に葬って欲しい」

リシュブル族長は重い決断を下した。

それが如何に重い決断であるか、彼の肩が震えている事からもよく分かる。

その握りしめた拳が、食いしばった口元がどれだけ苦渋の決断なのか誰にもよく分かった。

本当なら父親としてジャヌヴィアを、カールを抱き締めてやりたい所だろう？

しかし、それは族長として許されない事、族長としてケジメを付けなければ行けない事だった。

「捜査方針を発表する。

これより、ジャヌヴィア本名カール・ス・バーグは10億の賞金首として扱う事とする。

なお、プロジェクトFがらみの為、ジャヌヴィア事件は我々の手を離れ、次元航行隊に移管する。

スクライア一族についても次元航行隊が入って調査する事になる。

我々は賞金の支払い手続き以外から手を引く事になる」(課長

「そんな！そんな今までの私の努力はどうなるんですか？

せっかくジャヌヴィア専任でやって来たのに、
体を張ってここまでの情報を手に入れてきたのに、
ここで外される事に納得出来ません！」（グレイス

「グレイス君、君が相当に体を張ったのは分かっている。

今回の捜査でも抱かれたくない男にも体を許した、
そしてDNAを手に入れる為に苦渋の決断をした事も、
でもこれ以上君に傷付いて欲しくないんだよ」（課長

「いえ、ここまでやった以上は、ここまでやらせた以上彼に責任を
取って貰います。

責任を取らせる為に、この手で彼を葬る為に彼を追いかけて続けたい
んです！

彼は私が責任を持ってぶっ殺します！」（グレイス

その瞬間もの凄い殺気をばらまくグレイス、誰もが震え上がった。

「うわぁ、あれは相当怒ってるよ？」

「グレイスってものの凄く執念深いのね？恨まれたら恐ろしいわ」

「てか、捜査の為にあそこまで体を張れる事自体凄く執念だよ」

捜査本部を震え上がらせたグレイス。

結局彼女は次元航行隊に出向する事になった。

ジャヌヴィア専属の捜査官として……

今グレイスとカールの次元世界を股に掛けた壮大な超時空追いか
けっかが始まる。

ジャヌヴィアと夏休み（5）（後書き）

すいません、この話、今後は不定期更新になります。
何時更新出来るのか分からないので、気長にお待ち下さい。

転属（前書き）

「捜査4課より出向して参りましたグレイス・甲州です。宜しくお願ひします！」

「宜しくね？グレイス」（フェイト

グレイスは次元航行隊第1機動部隊預かりになった。

転属

9月1日グレイスに辞令が下りた。

グレイス捜査官、次元航行隊への出向を命じる。

なお、出向期間はジャヌヴィアが逮捕又は殺害されるその時までとする。

「はっ、辞令拝命致しました」

こうして彼女は次元航行隊へ出向しジャヌヴィアを追いかける事になった。

同日、全世界に向けてジャヌヴィアの手配書が配信される。

「怪盗ジャヌヴィア、本名…カール・ス・バーグ
年齢21才、身長159センチ50キロ、痩せ型、
賞金10億、生死を問わず。なお有力情報提供者には賞金300万」

この手配書は色々な所に波紋を投げかけた。

「まあ、可愛い顔してる。押し倒しちゃいたい！」

まあこう言う女性も多い様で、あっという間にジャヌヴィアファンクラブまで結成される。

「何だガキじゃねえか？これで10億？楽勝だぜ！」

「俺達こんなガキに遊ばれていたのか？」

「我々組織を舐めて貰っては困る、取引に現れたら殺す」

各方面に色々な思惑が渦巻いていた。

「くそう、いつの間に正体がばれた？いつの間に写真を撮られた？」
(カール)

彼は今もの凄く焦っていた。

これでは仕事がいやに嫌い、恐らくマフィア系の奴らは顔を見れば舐めてかかるだろう？

仕事料の減額を要求したり、仕事だけさせておいて金を払わない奴らも出てくるだろう？

この1年掛かって築き上げた物が一瞬で崩壊してしまった。

それにもう素顔で外を歩く事も叶わなくなった。

カールという名前を使う訳にも行かない。

彼は今、ミッドチルダのとある街のとあるマンションに身を潜めていた。

ここはカールの名で借りていた。

急いで荷物を纏めるとすぐに転移する。

直後だった。

部屋になだれ込んできたのは賞金稼ぎ達、もう既にカールの名前で借りている物件には管理局やら、賞金稼ぎやらの手が及び始めていた。

たった数時間でこの有様、彼は管理局を舐めていた事を反省する。

(多分リゾート中に捜査官を派遣したんだろう？)

そこで一人で宿泊していた人間の髪の毛などを集めて、分析したんだろうな？

何処かの事件現場で採取した髪の毛が有れば正体を知るくらいのことは出来る

後はそう言う独り者の写真を撮りまくっていれば必ずいつかは顔も分かる。

あの予告状は失敗だった)

そして今、彼はとある洞窟のアジトに身を隠す。

ここなら当分は捜査の手も及ばない、

自慢じゃあないがこのアジト洞窟内にも係わらず電気配線とインターネットはしっかりしている。

自分で工事した物だ。ここも何時までも安心という訳ではないが、取り敢えず暫くは大丈夫だろう？

「さてと、今は安全な拠点作りと偽装工作をしないとな」

そう、彼は契約している口座の名義変更やら、インターネットの解約、

新しい名義でのインターネット契約、電子マネーデバイスの変更などやる事がたくさんあった。

こうして彼の9月はその忙しさに忙殺されていく。

「捜査4課より出向して参りましたグレイス・甲州です。宜しくお願いたします！」

「宜しくね？グレイス」(フェイト

グレイスは次元航行隊第1機動部隊預かりになった。

そう、次元航行隊第1機動部隊、20隻のVX戦艦と数千名の人員から成る精鋭部隊、

次元航行隊は、その巨大な規模から全容を把握するのも難しいが、機動部隊だけでも100部隊有る。その頂点にいるのがフェイトさんなのだ。

他にも運輸部隊とかパトロール部隊とか色々分かれている。

他にも兵器試験部隊にはラベルダが所属しているし、特務部隊にはSEALSが居る。

「そう言えばあなた、まだ夏休み取ってないのよね？」

多分ジャヌヴィアも9月は動かないでしょ？と言うか動けないわね？恐らくは10月過ぎて世間のほとぼりが冷めるまでは動かないでしょうから、

今の内に夏休み取ったら？」（フェイト

そう、今は何もやる事はない、

時々入ってくる情報はジャヌヴィアのアジトが見つかったという話、しかもめぼしい物は何も出てこない、まあ見つかるアジトの多くはやや古めのマンションの一室、

ジャヌヴィアは意外と人混みの中に紛れていたりする。

そして彼は今一体何処にいるのか？何をしているのか？

そんな事を考えながら遅い2回目の夏休みを取るグレイスだった。

「あの子って前はあんなだったかしら？」

グレイスの変貌ぶりに少々戸惑うフェイトだった。

こう、何というのだろうか？目の奥に冷たい光を感じるといとか、殺気を宿しているといとか、そんな感じが見て取れる。

なんだか見ていて怖いと思うフェイトだった。

転属（後書き）

次回..カールの元にとんでも無い依頼が入る。

依頼（前書き）

「こんにちは、ジャヌヴィアです、私に依頼とはどう言う用件でしょうか？」

「お前がジャヌヴィアか？まだ若造だと聞いているがそんな事はどうでも良い、

もしこれが本当に出来るなら金は欲しいだけくれてやる、出来なければお前は死ぬだけだ」

依頼

それは10月に入った頃の事だった。

カールは新しい拠点を幾つも立ち上げていた。

大半は人里離れた洞窟などを改装し、住める様にしたアジト、勿論電気設備とインターネットの工事は自分でやる。

お金のかかりそうなマンションなどは出来る限り減らして、人の住まなくなった廃ビルや一軒家などを改装している。

他にも遺跡とかの地下室のある物などを利用し、狙われにくい場所をアジトに選んだ。

もうミッド中の古い拠点は殆ど賞金稼ぎの戦中に荒らされてしまった。

危険なので出向く事は出来ない。

彼は人混みへ出る時は自分だと分からない様に別人に化けたり、犬や鳥に化けたりして行動している。

大半、買い出しなどは人間、情報収集の時は動物という事が多い。

動物の時はとかく危なそうな連中の集まる場所を覗く様にしている。

そうやって賞金稼ぎがたむろしているのを発見した事も何度もある。やばくなればその近くの拠点は廃棄というのが一般的だ。

そうやってこの一ヶ月警戒を重ねて安全なアジトを作り上げてきたのだ。

そんな彼にネット経由で仕事 came。

多分、ジャヌヴィアでなければ出来ない仕事、それでなければ相当

な軍事力を持ってしかできない仕事だった。

彼は最初迷った。

でも今はもう金がない、仕事を選んでいる暇はない。

依頼主に連絡を取り、仕事の打ち合わせをするしかなかった。

依頼主の所に手紙が送られてくる、メールじゃあない、この時代に手書きの手紙だ。

いつもの予告状の入っている封筒、その中に手紙が入っている様だ。

その手紙を手にした依頼主はそれがただの手紙でないとすぐに気付いた。

手紙には大きくジャヌヴィアのサインがあるだけだが、依頼主が手に取るとモニターが開く、

画面には大きくゴシップ体のJの文字、そしてジャヌヴィアが通信してきた。

「こんにちは、ジャヌヴィアです、私に依頼とはどう言う用件でしょうか？」

「お前がジャヌヴィアか？まだ若造だと聞いているがそんな事はどうでも良い、

もしこれが本当に出来るなら金は欲しいだけくれてやる、出来なければお前は死ぬだけだ」

「随分傲慢なお方だ、僕は受けた依頼は完遂するのがモットーなのでね？」

まあ、受けるか受けないかは僕次第ですけどね？後、料金は僕の査定で決めさせて頂きますよ？」

「ふん、勝手にしろ、出来る物なら金は惜しまん」

「では内容をお聞きしましょう？」

「お前に頼みたい事は軌道拘置所に囚われている囚人を5人盗み出して欲しい、

それぞれ別々の世界の軌道拘置所に投獄されている。

もし失敗すればお前は逮捕され処刑させるだろう？

まあ実際に盗み出して欲しいのは一人だけなんだが、その仲間は人質みたいな物だ。

あいつは仲間を盾に取られなきゃあ言う事を聞かないだろうしな？」

「なるほど、随分難しい依頼だ。一人助け出す事に警戒が強化される。

最後の一人に至っては不可能と言っても良いでしょうね？ 僕以外は？」

「そうかやってくれるか？」

「やりましょう、ただし今回は難しすぎる内容なので、予告状は出さない、

そして依頼料は前金で50億、後金で50億頂きたい」

「随分ぼったくるな？」

「まあそれぐらいの準備が必要ですからね、必要な装備が揃うまで1〜2ヶ月は必要です。

お金が振り込まれ次第準備を始めて5人をお届けに上がったたら支払って頂きます」

「分かった。それで手を打とう」

こうして契約は成立した。

こちらはスクライア一族、連日の様に次元航行隊の調査が続いている。

流石にこれは難しい、スクライア一族と言っても血の繋がりのある者、無い者、

数多くいる、全部で2000人ぐらいか？

しかも何処かへ発掘に行っていたりしてこの場にいない人間も多い、取り調べは暗礁に乗り上げていた。

下手にカールの名前を出せば犯人に逃げられる可能性もある。

だから任意の事情聴取と言えど、下手な事は口に出来ない。

難しい捜査が続いていた。

夏休みから復帰したグレイスはスクライア一族の中にいた。

（恐らく、カールを複製した人間はかなりの大人の筈だ。

あの22年前の事故の時現場周辺にいた誰かという事になる。

そいつを洗い出せばこの事件全て収まりが付くかも知れない）（

グレイス

彼女は事件の経過から大凡の犯人像をプロファイリングしていた。

また族長がグレイスの元に呼ばれる。

「族長さん、もう一度お話を聞かせて欲しい事があります。

22年前当時、あの事故のあった遺跡に来ていた人物で現在35才以上の人間は何人いますか？

それからもし万が一そのメンバーの中から一族を抜けた人はどれだ

けいますか？」（グレイス

「一体何を考えて居るんだね？」（リシュブール・スクライア

「もし、本物のカールが死んだのが事故ではなくて事件だったらどうでしょう？

誰かがカールの命を狙ったとしたなら、そして今もあなたの命を狙っているとしたら？」

22年前と言えばJS事件の少し前、そしてプロジェクトF、大量の資金が管理局の最高評議会に流れ、次元海賊が横行し、数々の悲劇が起きた年、そして、今になってカールのプロジェクトFの出現、引かかる出来事が余りに多すぎる。

「もし、カールの命を狙うようなことを考える人間が居たとしたら最低でも12〜13才以上

若しくはそれ以上、そしてそれが可能だとしたら当時現場にいた人間だけと言う事になり、

その遺跡を調査した時一緒に来ていたメンバーの中に裏切り者が居る事になる。

そして現在最低でも35才以上になっているはずです」

グレイスはそうプロファイリングしていた。

「なるほど、そう言う事か？」（リシュブール

そう、グレイスはプロファイリングで犯人の片割れを捜そうとしていた。

有る程度メンバーを絞り込み、その中から、物欲、金銭欲、出世欲、怨恨の線から更に絞り込みを掛けようと言うのだ。

そうすれば絞られたメンバーをマークすればいい。
いずれは必ずぼろが出る。

グレイス捜査官の推理に脱帽の族長だった。

「おい、この所の取り調べ、誰か何かをやらかしたのか？」

「あの人グレイス捜査官って言うらしい、捜査4課の刑事だそうだ」

「4課って言うのと窃盗専門だよな？」

「誰かお宝を盗んだのか？」

「って言うかそんな事が族長にばれたらただじゃあ済まないよ、下手したら掟に従って殺されるわよ」

一族の中には、誰かが重要なお宝を盗んだらしいという噂が広がり始めていた。

依頼（後書き）

次回..軌道拘置所からあの5人が脱走する。

スカリエッツィ脱獄！（前書き）

「お前をそこから出してやる。だから私の指示に従ってくれ、
下手な事をすればそれこそ銃殺されるぞ？」

スカリエッツィ脱獄!

ある日の事だった。

スカリエッツィ博士は今日も時間潰しに一般人に理解出来ない化学式を紙に書き出していた。

最近は取り調べもなく、面会に来る人もなく、看守さえ話しかけてくれない日々、

暇を持て余し、紙と鉛筆と地球から取り寄せて貰った論文を取り纏めた本を片手に研究する日々が続いている。

主に、シュレティンガーの3定理や相対性理論、素粒子物理学と言った物が多い様だ。

新しい本が入ると喜々として貪る様に読み、そしてノートに何かを書き留めては喜んでいる。

まあ、マッドサイエンティスト、実験は出来なくても理論だけでも新しい研究はいくらでも出来る。

彼はそれなりに充実した日々を送っていた。

ここに投獄されて、ただ寝るか食うしかできなかった日々は地獄だったが、それなりの書籍や研究書が有れば、

彼は何処だって天国なのだ。

それに体力を落とさないために筋トレも欠かさずやっている。

いつかここを逃げ出す時のために、腹筋、背筋、腕立て伏せぐらいは毎日欠かさずやっている。

そんな彼に、とうとう脱走のチャンスがやってきた。

その日、朝の食事の中に異物が紛れ込んでいた。

何だろう?何か補聴器の様な?彼はそれを見るとすぐにそれが何であるか理解した。

通信機だった。誰が何のために?そこまでは分からなかったが、

それでもこれが唯一無二の脱獄のチャンスであると理解していた。彼はニヤリと笑いながらそのチャンスを待つ事にした。

同じ事はウーノ、トーレ、クアットロ、セツテの所でも起きていた。

ご丁寧に通信機にはJS印まで入っていたりする。

「これは近い内に脱獄出来る」

彼女たちもそう確信した。

脱走のチャンスはすぐにやってきた。

まずスカリエッティの通信機に通信が入る。

「お前をそこから出してやる。だから私の指示に従ってくれ、下手な事をすればそれこそ銃殺されるぞ？」

従うしかなかった。

こちらからの呼びかけには一切応じない、当たり前的事だが、恐ろしく切れる奴だと思った。

その日の昼、看守が食事を運んでくる。

寝たふりをして待つスカリエッティ、そう、これが脱獄のチャンスだった。

看守が独房との仕切の防弾ガラスに手を触れた瞬間、一瞬だけ白く光った物の、

スカリエッティは寝たままだった。

そう、軌道拘置所の独房は、室内で何かされないために廊下との仕切は50mmの防弾ガラスだ。

部屋の中は丸見え、反対側は下の世界がよく見える様にやっぱり防

弾ガラスだ。

まあ、トイレだけは個室になっている物の、それ以外にプライバシーはない。

あと独房一つ一つに面会部屋兼、食事の受け渡し所になっていたりする。

ここが唯一外に出るための場所でもある。

看守は食事を差し入れると朝の食事を引き上げてその場を後にした。

同日、看守が一人行方不明になったという。

「じゃあ、次に行きましようか？」

「ふふふつ、君もなかなかやるじゃあないか？」

まさかあんな方法で脱獄させられるとは思っても見なかった」

「早い事仕事を済ませませんと、何時気付かれるか分かりませんが、あなたと同じ方法で他の4人も助け出す手はずになっていますので、気付かれたら見捨てますよ」

「なるほど、実に分かり易い」

そして、スカリエッティは自ら通信機のマイクを取った。

「セツテ、聞こえるか？ 今から助けに行く、寝たふりをしたまま待機だ。

余計な動きをするなよ？ 後はこちらの救助が行くから指示に従ってくれればいい」

近い世界から順番に救助が行く。

まずはセツテ、次にトーレ、ウーノ、クアットロという順番だった。

「ドクター、お久しぶりです」（セツテ

「暫く見ない間に随分大人になったな？」（スカリエッティ

「はい……ドクターも随分年を取られました」（セツテ

齡60を過ぎて、スカリエッティも髪の毛にずいぶん白い物が混じる様になった。

しかし、体力だけは衰えていない様だ。

抱き合って喜ぶ二人、こうしてその日の内に脱獄が行われた。でも、一人だけ仲間に歓迎されないのが居た。

「あの、どちら様でしょう？」（スカリエッティ

「やだなくドクター、クアットロですよ、忘れましたか？」

この5人の中で最も大きく見た目が変わったのはクアットロだった。

どう見てもクアットロではない、その面影さえない彼女はどこからどう見てもただの太ったおばさんだった。

この21年脱獄を夢見て体力を落とさないだけのトレーニングを積んできたスカリエッティ達と違い、クアットロは極めて現実主義だった。

恐らく誰か外から助けに来ない限りは絶対に脱獄は不可能、そんな助けに来てくれるあてなんて無いし、一生ここから出られないと思った。

それ故彼女はただ食べる事が唯一の楽しみとなり、その後は食っちゃ寝するだけの生活を20年も続けてしまった。

結果はこの有様、20年掛けて信じられないほどに育ってしまった。それこそただの巨漢女だ。

「貴様それでも戦闘機人の端くれか！恥を知れ！」（トーレ

「まあ、これでは逃避行の足手まといになるだけだわ？」（ウーノ

「み、醜い」（セツテ

とまあ散々な言われ様だった。

「所で、そろそろ君の目的を聞きたい。何のために我々を脱獄させた？」（スカリエッティ

「やだなあ、お金のために決まってるじゃないですか？
あなた方を連れてくれば100億払ってくれるって人がいましてね、
それで僕が仕事を受けたんですよ」

「なるほど、それで仮面を外さない訳か？」（スカリエッティ

「まあ、顔を知らなければ厄介ごとに付き合わされずに済みそうですから？取り敢えずは」

「胡散臭い奴だな？この場でその仮面を剥いでやろうか？」（トーレ

「今剥がなくてもいずれ僕の顔も経歴も分かりますよ、
僕も管理局に追われる犯罪者で10億の賞金首ですから」

「なんとまあ、奇特定の犯罪者も居たものだ」（スカリエッティ

「取り敢えず、僕はお金を受け取りたいんでそれまでは付き合ってくださいね？」

僕の契約はクライアントの所にあなた方を連れて行く事ですから？それ以降はどうしようとあなた方の勝手です。

せめて助け出した礼としてそれ位付き合ってくださいね？」

「良からう、その後は我々の好きにさせて貰おう」（スカリエッティ

「良いんですか？ドクター、こんな得体の知れない奴の言いなりになっ

「大丈夫だ、こいつは純粹に金が欲しいだけだと見た。
それだけの為にあそこまでの危険を冒したという事はプロ中のプロだ。

恐らく一匹狼だろう？金さえ入れれば我々にもクライアントにもそれ以上関わりはしない、

そう言う人種だ。だからそれまでは我々にも手出しはしないだろうし、

安全は保証されていると見て良いだろう？」（スカリエッティ

「まあ、脱獄がばれて暫くは大騒ぎになるでしょうから、
世間のほとぼりが冷めるまでは僕のアジトで生活して貰います」

そして、脱獄がばれたのはその翌日の事だった。

食事をしないクアットロに不信感を抱いた看守が独房に入ってみて気が付いた。

クアットロに見せかけてベッドに横たわっていたのは行方不明になった看守だった。

そう、ジャヌヴィアは軌道拘置所に侵入すると、何カ所か防犯センサーを壊し、

かつ、警備室からは分からない様にした上で作戦を遂行していた。まず、独房付近のAMFも壊して使えない様にした。

防弾ガラスに触れたのはガラスに幻術を貼り付ける為だった。

これで寝ていて動かない様に見せていた。

その間に食事を差し入れるふりをして特殊なアイテムを取り出した。4次元ボックス、そう呼ばれる10センチ四方の小さな箱は、中に10m四方の空間を内蔵している。

この中には自分と入れ替わった看守が入れられていた。勿論薬で昏倒させてある。

今度はその看守に幻術の着ぐるみを着せてベッドに入れる。

そして、そのボックスにスカリエッティ達が入って独房を後にしたのである。

ガラスに張った幻術が解けた所で暫くは気付かないだろうから、何時気付かれるかという心配はあった。

でも何とか上手く行った。実際ばれたのはクアットロを脱獄させてから10時間以上経っていた。

脱獄がばれて世間は大騒ぎになった。

非常線が張られて大騒ぎになった頃には、彼らの行方は杳として知れなかった。

スカリエッツィ脱獄！（後書き）

次回…ジャヌヴィアのクライアントと接触するスカリエッツィ、し
かし……

交渉決裂（前書き）

「待て、スカリエッツィ、このワシに力を貸してはくれんのか？」
（バーン・トスパー）

「くどい！ 私は時間の無駄遣いが大嫌いなのだよ」（スカリエッツィ）

交渉決裂

「一体刑務課は何をやっていたんだ！」（クロノ

クロノ局長は激しく刑務部長を叱責した。

すぐにスカリエッティ達の脱走が公表され一人当たり15億の賞金
が掛けられた。

翌日、臨時の人事異動が発表され、刑務部長を筆頭に数多くの職
員が左遷又は首になった。

後からの取り調べによると、外部からの協力者が脱走させた事は明
らかだった。

「一体誰がこんな事を？」

現在捜査一課、捜査二課がこの脱獄事件の捜査に当たっている。
でもこの鉄壁の警備を誇る軌道拘置所にどうやって侵入したのか？
どうやって彼らを連れ出したが全く分からなかった。

そう、軌道拘置所はその内部は殆どAMF空間、まともに魔法は
使えないし、

使えばセンサーに引っかかる。まともに魔法が使えるのはセンサー
の無い護送挺発着所ぐらいな物だ。

現場検証の結果、いくつかのセンサーやAMF発生装置が壊されて
いた事が判明する。

「一体いつの間に？」

分からない事が多すぎる。

ただ分かった事は、これだけの事をやるには最低3回は侵入していなければ出来ないという事だった。

「恐らく、侵入して手引きした奴はジャヌヴィアクラスの侵入のプロだ」

現場検証して分かった事はここまでだった。

「いや、ここは快適で良いよ」（スカリエッティ

「まあ穴蔵暮らしでなければもっと快適だけど……」（ウーノ

スカリエッティはまた研究を始める。

逃走する時に大事なメモ書きや書籍は持てるだけ持ってきた。

ここにはパソコンもある。

どうにかある程度の研究を出来そうだ。

「あのーちゃんと食費を払って欲しいんですが……」（ジャヌヴィア

ただ食っちゃ寝するだけのクアットロにちょっとお冠のジャヌヴィアだった。

「そう言えば妹たちはどうなったんだ？」（トーレ

そう、彼女たちの妹たち、今はどうしているのか気になる所だ。下手にパソコンからネットに繋がば居場所がばれる可能性もある。ジャヌヴィアに聞いてみた。

「なるほど、まだそんなに姉妹がみえるの？ 分かりました調べてきましょう？」（ジャヌヴィア

半日もしないうちに、ジャヌヴィアは情報を持ち帰ってきた。

「それぞれに就職されていますね？内3人は結婚されてて子供も居ます」

その言葉が信じられないという感じのスカリエッティ達、

「馬鹿な、彼女たちは体を調整しなければ子供は出来ないはずだぞ？」（スカリエッティ）

「男の方を改造したみたいですけど……」

「そう言う手もあったんだ？」（ウーノ）

「それと姉妹の数ですけど、聞いていたより随分多いんですが……」

そう、ナンバーズ達以外に下請け組織が作り出した妹たちが60人近く、

一番下はまだ11才だという。更に甥や姪まで入れたら既に70人以上いるのだ。

驚きだった。

「そ、それだけの戦力が集まったら管理局に勝てるかも？」（クアットロ）

「無駄ですよ、彼女たちは今は管理局に忠誠を誓っていますし、聖王教会にいる3人は聖王陛下に忠誠を誓っている身です。多分裏切る事はないでしょう？」

「聖王ってまさかあのヴィヴィオが……？」（クアットロ

「はい、ヴィヴィ陛下は今ヴェルカ領を統治されています」

この20年の間にいろんな事が変わりすぎた。

「それと管理局に手を出そうだなんて考えない方が良いでしょう？

20年前だったらそれほど強い人はいませんでしたが、

今はSSSオーバーが数百人いる状態です。

まともに戦って勝てる様な事は無いですね？」

「馬鹿な、SSSと言えば神の如き存在だぞ、

そんな力を持った人間など殆ど育たんはずだが……」（スカリエツ

ティ

「それが可能なんですよ、あの高町なのはが学校を開いて教えていますからね？」

あそこから巣立った卒業生の中にやたらとレベルの高い魔導士が多いんです。

中でもスペシャルフォース隊の部隊長、ヴァンサン・ロシェット一佐は、

次元世界最強を誇る使い手です。過去にフォルスの正規軍を相手にたった一人で勝利を収め、

時に世界を一つ楽々滅ぼしたほどの化け物だ。まともに戦ったら勝てる人間なんて居ませんよ。

あの欲望の書「グール」だって相手に成らずに破れ去れましたから」

「馬鹿な、グールと言えばその昔いくつもの世界を喰らい殺したと言う伝説の魔導書だぞ」（ウーノ

「あいつの方がよっぽどの化け物ですよ？
とにかく管理局に復讐しようなんて馬鹿な事は考えないで下さいね
？」

しっかりと釘を刺されたスカリエッティ達、それでも復讐を諦めていない人間が一人、
クアットロだった。やがて彼女はスカリエッティと袂を分かつ事になる。

それからおよそ2週間、世間のほとぼりも冷め始め、非常線も解かれる事となった。
でも相変わらず空港などでは厳しい警戒が続いている。

「それじゃあ行きましょうか、クライアントの元に」

かくして彼らは「闇に潜む巨悪」に会いに行く事となった。

「ジャヌヴィアよ、よくあそこからスカリエッティを脱獄させた物だ、で？彼らは今どこに？」

「勿論連れてきていますよ、でも、報酬の支払いを先にして頂きたい
支払われればすぐにお引き合わせ致します」（ジャヌヴィア）

そう、ここで裏切ればもうスカリエッティに会うことは叶わない、
そしてジャヌヴィアを裏切れば最早仕事を受けて貰う事は出来ない
のだ。

ジャヌヴィアは通信デバイスを取り出した。

「確かに50億受け取りました」

ジャヌヴィアは懷から小さな箱を取り出した。
蓋を開けるとスカリエッティ達が飛び出してくる。

「じゃあ僕はこの辺で……」(ジャヌヴィア)

ジャヌヴィアはそう言つて姿を消した。

「ふつ、あなたが黒幕だとは片腹痛い」

思わず吹き出したスカリエッティ、それもその筈だった。

その黒幕とは、バーン・トスパ―元提督、本局参事官の一人でもあった人だった。

そう、彼こそマフィア連合を作り上げ、数々の違法薬物や武器の密輸に係わり、
最高評議会亡き後にそれを受け継いでいた人物だった。

「確かあなたは八神はやてに殺されたと聞いていたが……」(スカリエッティ)

「ふん、そう簡単には死なんよ、この次元世界を全て手に入れるまでは……」

だからスカリエッティ手を貸せ、
アルハザードを再びこの世に蘇られて奴らに復讐するのだ!」(バーン・トスパ―)

「断る!あの実験は失敗だったんだ。これ以上続けても意味のない事だ」(スカリエッティ)

「貴様、ワシを裏切る気か?ワシは嘗ての最高評議会の側近だぞ?」

（バーン・トスパー）

「でも今はただの老人だ、強いて言うならただの犯罪集団の首領で、存在すら確認されていない犯罪者と言った所か？」（スカリエッティ）

「ドクター、棚上げにしていたあの実験って失敗だったんですか？」
（クアットロ）

「ああ、まだ足りないデータがあったんだ。

皮肉にもそのデータを持っていたのは八神はやてだったよ。

彼女はそのデータを持って私の計算に誤りがあると指摘したんだ。

まさか頭で負けるとは思っても依らなかったよ、

まあお陰でそのデータを貰って再計算する事が出来た。

結果は実験失敗、大爆発して終わりさ、

それもこの次元世界全てを消し去るほどの大爆発でね？

まあ、最終兵器として使うなら有効だろうな？」（スカリエッティ）

「そんな……じゃあアルハザードは呼び出せないんですね？

一瞬でこの体を元に戻す事は叶わないんですね？」（クアットロ）

「まあ、そう言う事だ、私はもう管理局に手を出す事を諦めたよ、戦力が違いすぎる、それに私は私のしたい研究が出来ればそれで良いんだ。

管理局とはドンパチやる気はない」（スカリエッティ）

「そんな、この20年の恨みを晴らさないんですか？

やり方によっては勝つ事も可能だと思います。

私は何としても八神はやてと高町なのはにだけは復讐しますよ！」

（クアットロ）

「不毛だ、ここで時間を使っている事自体不毛だ。

研究をする時間が欲しい、時間の無駄遣いさえ惜しいのだ。

行くぞ、私にはまだやりたい研究が幾つもある」(スカリエッティ

「待て、スカリエッティ、このワシに力を貸してはくれんのか？」

(バーン・トスパー

「くどい！私は時間の無駄遣いが大嫌いなのだよ」(スカリエッティ

「私はここに残ります！ここに残っていつか必ず復讐を遂げて見せます！」(クアットロ

「勝手にすればいい、強制はせんよ」(スカリエッティ

こうしてスカリエッティは彼らの前から姿を消した。

クアットロはバーン・トスパーと共にミッドチルダに復讐を果たす為、その準備に入った。

交渉決裂（後書き）

次回…呆れたスカリエッツィの暮らしぶり、またジャヌヴィアの所に転がり込む。

ただのヒモ（前書き）

「申し訳ない、非常に申し訳ないのだが、我々をもう少し匿って欲しい、

それに我らは無一文なんだ、生活する金も、アジトを持つ資金さえない」（ウーノ）

ウーノはそう言って頭を下げる。

ただのヒモ

「まったくどうしてここが分かったんですか？」（ジャヌヴィア

「蛇の道は蛇と言う奴さ」（スカリエッティ

彼らは今ジャヌヴィアのアジトにやって来ていた。

「申し訳ない、非常に申し訳ないのだが、我々をもう少し匿って欲しい、

それに我らは無一文なんだ、生活する金も、アジトを持つ資金さえない」（ウーノ

ウーノはそう言って頭を下げる。

「まったくしょうが無いなあ、その代わり見つからないで下さいよ、それと家事ぐらいはこなして下さいね？」（ジャヌヴィア

ここはジャヌヴィアのアジトの一つ、

この前の洞窟とは違う場所にある洞窟なのだが、
どうやったか分からないが彼らはそこを嗅ぎ付けてきた。

鼻だけは非常に利く様だ。

彼女たちは優秀だった。

料理はウーノが、掃除洗濯はトーレが、食料の調達はセツテの仕事だった。

で？肝心のドクターはと言うと相変わらず訳の分からない研究に没頭していたりする。

「まったくこいつただのヒモだな？生活力ゼロだ」

その通りだったりする。

甲斐甲斐しくドクターの世話をする彼女たちが少し不憫に感じるほどだ。

「しかしセツテの変装は上手いな？」

ジャヌヴィアが感心する位別人だった。

そんな彼女だからこそ、情報収集と買い出しに行けるのだ。

まあ大体一週間分の食料を買い出してきて、

その後は何もしないという生活が彼女のスタイルだったりする。

一方ジャヌヴィアはと言うと、時々何らかの依頼をこなしている様だった。

「しかし、金がないね？」（セツテ

「いっそのこと現金輸送車でも襲うか？」（トーレ

「やめた方が良い、そこから足が付いたらどうする？」（ウーノ

「心配する事はない、もうすぐ大金が入る事になっている。

それに管理局の奴らも喜ぶだろうよ？」（スカリエッティ

「ドクターそれはどう言う事ですか？」（ウーノ

「なに、下請け組織で生き残っていた奴らで、非合法的な薬物を取り扱っている奴らが居る。

まあ平たく言ってしまうえば麻薬の密輸だ。そいつらが近々大きな取

引をするらしい。

そこを襲撃して金だけ頂いてくればそれで良いんだ」(スカリエツ
ティ

そう、確かに現金輸送車などは狙われ易い為、屈強なガードマン
が付いている。

管理局系の銀行ならスクールの卒業生、民間ならそれぞれの警備会
社になるが、

最近は月村警備保障とか、バニングス警備が下請けしている。

もし、そんな現金輸送車を襲えば逆に返り討ちに会うのは火を見る
より明らかだ。

でも、非合法な金ならそれほど警備も厳しくはないし、すぐに武装
隊が嗅ぎ付けたりはしない。

充分に逃走出来ると踏んでの作戦だった。

そう、彼女たちは嘗てミッドチルダの正規軍を相手に互角以上に
戦った猛者達、

易々と負けたりはしない。

こうして作戦は決行される事になった。

「場所はあるそこだ」

そこはミッドチルダ12番目の都市ダベンポート、大きな港町だ。
その倉庫街の一角に厳つい黒塗りの車が合計8台、通りを塞ぐ様に
それぞれ止められ、

どう見てもマフィアな皆さんが睨み合っている。

そして今まさに取引が行われようとしていた。

突然、何かが投げ込まれた。

スタングレネード、音と光で一瞬だけ人間を麻痺させる武器だ。

その瞬間、二人が突っ込んでくる。

「ライドインパルス！」

「スローターアームズ！」

一瞬にして用心棒達を蹴散らして金を奪うと逃走する彼女たち、作戦はまんまと成功した。

一方マフィア達は激怒する、まさかいきなり襲われるとは思わなかったし、

金を横取りされるなんて想定外だった。

そしてマシンガンを乱射しながら彼女たちを追いかけて始めた。

でもそれが行けなかった。

すぐに管理局に嗅ぎ付けられる事になる。

そしてあっという間に打ち倒されて逮捕された。

そして金だけ持ち逃げされてしまった。

そう、ここにもスクール出身者が居たのだ。

1074部隊の小隊の一つに、サヴィニー・レボーヌ小隊長が居た。スクール第7期生で2組出身、槍の使い手で戦闘レベルはSSSクラスだった。

魔力はSでまあ標準的なのだが、とにかく恐ろしく強かった。

当然、マフィア達では手も足も出せずに終わってしまった。

おまけに麻薬取締法違反、違法武器所持の現行犯逮捕だった。

でも、この逮捕が他の事件と結び付いていこうとは誰も気が付かない事だった。

一方、こちらは108部隊、スカリエッティ一味が脱走した事を受けて

ノーヴェやウエンディ達に監視が付く様になった。

仮にも過去の仲間である。

必ずもう一度仲間を引き戻しに来るであろうと警戒されていた。

「もう犯罪者になんか成るかよ！子供を泣かせる訳無いだろ！」（ノーヴェ）

「鬱陶しいなあ、もうそんなことするはず無いのに」（ディエチ

とまあそんな感じである。

同じ事は教会でも起きていた。

「ごめんね、みんな」（ヴィヴィオ

「陛下、謝る必要はありません、我々の不徳の致す所です。

それでも我々は陛下の持ち物、反旗を翻すようなことは致しません、陛下の命を守る為なら、我々は喜んで命を投げ出しましょう」

3人はヴィヴィオの前にそう誓いを立てた。

一方、クアットロはそんな事とはつゆ知らず、嘗ての仲間 접촉を図ろうとしていた。

「ちっ、たったの5億かよ？しけてやがんな？」（トーレ

大型のアタッシユケースの中にはその程度の現金しか入っていませんでした。

でもこれで当分は生活出来そうだ。

ただのヒモ（後書き）

次回…クアットロは元ナンバーズ達を味方に引き入れる為接触を図ろうとする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035w/>

怪盗ジャヌヴィア

2011年12月20日17時45分発行